



Title	処方せんからみた抗ガン剤
Author(s)	中村, 繁一
Citation	癌と人. 1978, 6, p. 22-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24155
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

処方せんからみた抗ガン剤

中 村 繁 一*

はじめに

わが国における死因順位は、昭和33年から今日まで、トップが脳血管疾患で、第2位は悪性新生物、第3位が心疾患の順となっている。

しかもこれらの疾患は、40歳から60歳にかけての、働き盛りの年令層に多くみられるのは由々しき問題である。

しかし一方、厚生省が本年7月に発表した日本人の平均寿命は、男子が72・69歳、女子は77・95歳と、前回の発表より更り延長されている。

このことは、脳血管疾患をはじめ、悪性新生物、心疾患などに使用する薬剤の開発と相まって、わが国の成人病対策、特に循環器疾患並びにガンなどの集団検診による早期発見対策の成果ともいえる。

今回大阪癌研究会が、乳ガン、直腸ガンの集団検診と並行して、胃ガン、大腸ガンなどの、

いわゆる消化管ガンの早期発見のために、糞便潜血反応検査の実施に踏み切られたことは、喜ばしい限りである。

ガン患者の増加

さて厚生省の人口動態統計では、ガンは悪性新生物として分類されている。

それによると、最近6ケ年間におけるガンによる死亡者は、下表のように増加がみられる。

ガンの中でもわが国では、胃ガンによる死者者が男女とも多い。

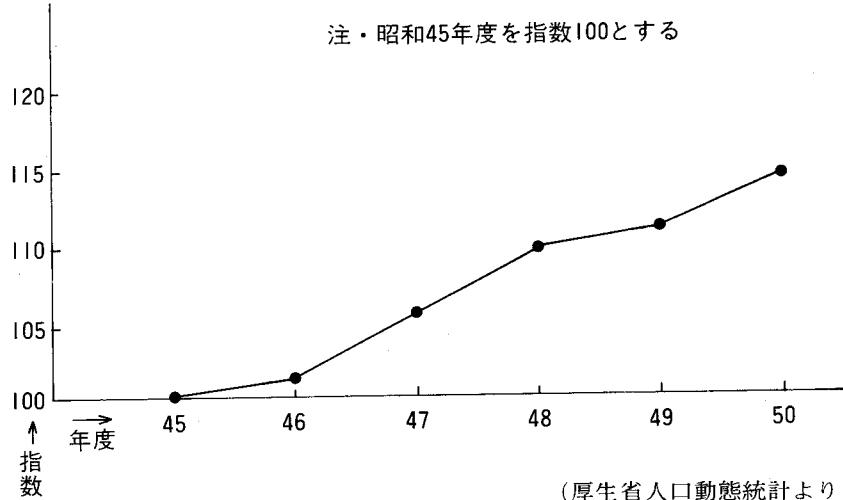
その原因は気候、風土、体质、食べもの等が関係するとも言われている。

食塩を余計にとっている地方には、胃ガンが多いとか、牛乳を多く飲む国民には、胃ガンが少い、などときく。

しかし食べものなどに神経質になりすぎると、安心して食べられるものは、なくなると思う。

ガンによる死者者指数年度別比較表

注・昭和45年度を指数100とする



* (大阪大学微生物病研究所附属病院薬剤部長)

それよりも、ガンの早期発見のために、少くとも年に1回ぐらいは、検診をうけるべきであろう。

抗ガン剤の開発

「結核に対するストマイのように、ガンには特効薬はないのか？」

こんな質問をうけることがある。

「今のところない」と答えざるを得ない。

しかしガンの治療剤は、毎年といってよいぐらいに開発されている。

現在市場には、50数種がみられる。

従前からガンの治療は、外科手術と放射線療法に依存していたが1959年に、腫瘍の縮少を示すというので、発売が許可された抗ガン剤の抗生物質マイトマイシンCが、世間から注目されだした頃より、各種抗ガン剤が相ついで治療界に登場はじめた。

最近では、白血病に効果のある薬剤とか、胃ガンに、皮膚ガンに効果のある薬剤といった具合に、ガンの種類によって使いができるまでに、種々の薬剤が開発されている。

当病院にも、20数種の抗ガン剤が在庫していて、その約半数は殆んど毎日の処方せんにみられる。

多剤併用療法

これらの薬剤は、単独で処方されることもあるが、抗ガン剤の殆んどすべてに副作用がみられるので、この副作用を低減するために、また相乗効果を期待するために、2種類とか、3種類を併用するいわゆる多剤併用療法が行なわれている。

特に注射剤を点滴静注するような場合によくみられる。

いづれにしても、一旦ガンに侵されれば、ガン細胞は急速に増殖し、更には転移して、いろいろの臓器を侵襲する。

従って全身に拡がったような場合には、外科療法、放射線療法と相まって、化学療法に頼らざるを得なくなる。

以下に、最近話題となった抗ガン剤の1、2にふれてみたい。

カワラタケとは

昭和52年11月に薬価基準の大改正が行なわれ、そのとき新たに薬価基準に収載された薬剤に、PSKとよばれる抗ガン剤がある。

これはサルノコシカケ科に属するカワラタケの菌糸体より得られたものを、その成分としたものである。

わが国で昔から、サルノコシカケはガンに効くといわれていた。

たまたま今から7～8年前に、滋賀県の一病院で、胃ガンの末期患者がサルノコシカケの熱水抽出物を服用して、病気がよくなつた事実に注目した呉羽化学の研究者が、手がけたのがそもそもの発端である。

カワラタケは、直径3～5cm、厚さは約2mmで、表面は灰色、灰褐色とか、黒褐色、黒色で、同心状に生えている粗毛が目印で、名前が示すように、屋根瓦のように群生しているのが特長といわれている。

PSKの性状は約18～38%の蛋白質を含む蛋白多糖体で、平均分子量は約10万である。

このPSKは、ガン細胞を直接制圧するのではなく、リンパ球の中の胸腺細胞に働きかけて免疫力を強める作用があると言われている。

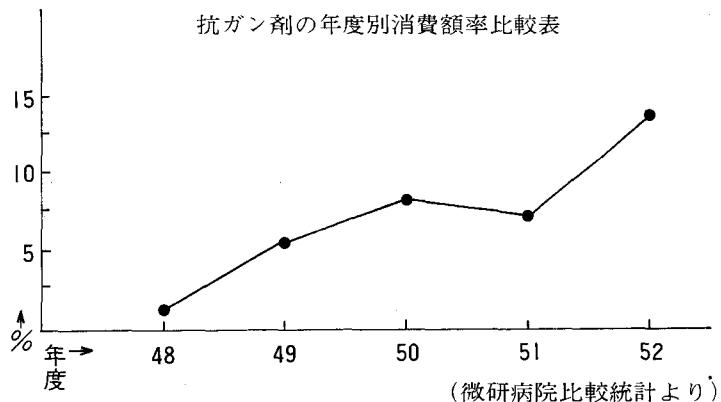
このものの特長を、東京の癌研究会癌研究所癌化学療法センターの塙越部長は「現在のところ、殆んど毒性はなく、経口投与で有効、しかも免疫刺激をする働きがあるほか、弱いながらも腫瘍細胞に対する直接作用をもっている」と放送されている。

抗ガン剤の坐薬

わが国で坐薬といえば、痔疾患などの場合に、局所を使用する薬剤という観念をもっている。

しかし最近は、大腿四頭筋拘縮症などのように、注射禍が大きく社会問題としてとりあげられて以来、注射剤にかわって坐薬が、新しい投与方法として注目されました。

坐薬を挿入すると、はじめのうちは直腸附近にとどまるが、液化することにより薬剤が、肝臓で不活化されることなく、直接全身循環にはいる。



このような全身作用を目的とした坐薬が、最近は解熱、鎮痛、消炎剤をはじめ、抗生物質から抗ガン剤にまで使用されだした。

坐薬には胃腸障害もなく、食事の影響もないし、用法が簡便で持続時間が長いなどの利点がみられる。

そのため今後は坐薬が脚光を浴びてくるようと思われる。

当病院においても、本年3月薬価基準に採用された抗ガン剤の坐薬が、全身投与の目的でよく処方されている。

おわりに

当病院における医薬品の、薬効別年間消費額

のうちで、抗ガン剤（抗生物質を除く）の占めるパーセントを調査してみると、上表のように増加の傾向がみられる。

このことは、新規に開発された抗ガン剤が、相ついで薬価基準に収載されてゆくためもある。

しかしこれらの薬剤はいづれも、現時点においては延命効果を期待するに過ぎない。

ガンに対する特効薬のない現在は、やはり早期発見早期手術がガン治療の主体である。

人類をガンから救うために、免疫療法の研究と相まって、ガン細胞のみを撲滅する薬剤の、一日もはやく開発されることを祈念してやまない。